

第十六章 明暗二重奏

一 新築丸善の威容

明治四十三年の陽春とともに丸善の歴史はまた新しき歴史の一頁をひらく。日本橋と銀座の接点といえは、東京でも目ぬき中の目ぬきの街である。そこに巍峨たる新興建築のしだいにふえてくる中に、依然たる旧態の丈けの低い日本式社屋で立ちすくんでいるのは、たとえ外見の虚飾を少しでも減じて一錢でも安く洋書を顧客に奉仕するためだと呼号しても、それは要するに負け惜しみの観があったが、東京市の区劃整理は多年懸案の新建築に踏みきる決断をうながし、そこへ云うならばタイムリイの類焼で、焼け太りに新威容の丸善は出現した。

中村日記を見よう。

「四月二十日 夜来商話会五月早々開店のコトヲ報ス出席役員部長課長外早矢仕（四郎）内田両出席セリ但役員ノ内小柳津課長ノ内白井欠席セリ

五月一日 本日新築落成式ヲ行ヒ各高等学校以上ニハ記念品トシウエブスター新字典巻部ツ、ヲ贈リ来客ニハ本日ヨリ数日間記念手帳ヲ贈ルコトトセリ又新築関係者ニ夫々祝義ヲ贈リ会社員一同ニハ酒肴料ヲ給シ設計者中村達太郎佐野利器監督佐野源次郎請負人清水釘吉原林之助岡本金太郎鈴木町田山田佐藤顧問内田ヲ午後五



新築赤煉瓦社屋とその頃の日本橋通（小川一真編「東京風景」より）

時ヨリ上野精養軒ニ招待シ祝意ヲ表ス会社ヨリ列席者ハ小柳津山崎斎藤金沢伴及予ノ六名午後九時四十分散会ス余興ハ円喬ノ落語白鶴ノ講談ナリキ。

五月九日 市内新聞記者（三十余名）ヲ招キ新築建物ヲ一覽セシメ其ヨリ帝国ホテルニ昼餐ヲ供シ記念写真一組及記念紙入ヲ贈ル参会者新聞記者ニハ三宅（雪嶺）徳富（蘇峰）夏目（漱石）石川（半山）等三十名会社ヨリ小柳津山崎斎藤内田等九名小柳津謝辞ヲ陳ヘ三宅統テ石川答辞ヲ陳ヘ次ニ内田重テ謝辞ヲノベ午後二時三十分散会す。

この新建築は、煉瓦づくり四階建て、わが国ではじめての鉄骨建築である点が、海外文明の移入口たる新奇ごのみの丸善の特長を発揮したので、大いに建築界注目の的となった。正面入口には新海竹太郎の手長足長の彫刻をかざり、一階は洋品、文房具、国内刊行書、二階は洋書、三階は事務室、四階はストック置場という割り当て

になっている。

建築批評家の黒田鵬心が「建築雑誌（明治四十三年十二月）」において、だいたい次のような批評をこころみている。

「丸善の建築様式はゴシック式とかルネッサン式とかの従来の定まった型にはよらないで、最も自由に色々の手法を取り入れて新しい風を出したところに特色があり、佐野式とでも言うべきものである。そして簡単のようでなかなか複雑した構造をもつてゐる。この建築は東は電車道に面し、南は横通りに接し、北と西とは人家に隣接してゐる。従つて東面（正面）と南面とが、構造上からも美観の上からも重要な点である。それ故正面は先づ材料の赤い煉瓦と白い石との配合、柱窓塔等の構造、その他の装飾によつて美しい表現を見せて居り、正面と南側面との接合点をなす角は円くして屋根には特に大きな円塔をつけ、角の構造が強められてゐる。ただ二階が少し高すぎると変化に富みすぎて統一の感じの弱いのが欠点である。この建物は正面をやや多く見る様にして角の方から眺める時、最もいい形を示してゐる。」

二「白樺」発行

この新築祝いと前後して、丸善の外囲に、明暗をくつきりと染め分けにしたような二つの事件がおこった。ひとつは文学雑誌「白樺」の発行であり、今ひとつはいうところの大逆事件である。どちらも丸善とは直接の関係がなく、その点で丸善には責任も功績もともにないが、その販売する書物が、両事件の根底の思想感情をつちこう資源

となっているため、大なり小なりの影響を受けることを免れなかった。

「白樺」の発行は、新築丸善の祝いよりも一か月前の四月一日日付になっている。これを逸早く取り上げて紹介したのは、同月十五日発行の「文章世界」であった。十五日発行だから批評に間にあったのである。

「純袴子弟の間から新たに発行された文芸雑誌である。こういう社会からこういう雑誌の発行されたということは、その出来の如何にかかわらず、とにかく人をして文芸の力ということを思わしめるに足る。面白い現象だと思う」

という書き出しである。繚こゝろとあるから前田木城の筆である。同じ人がその第二号の批評に

「有島武郎の『二つの道』、有島壬生馬の『画家ポール・セザンヌ』、及び武者小路実篤の脚本『ある家庭』など、挿画の『タイチの女』と、セザンヌの『静物』とは清爽とでも云ったら当るかと思われるような味があった（これが全文）」

と云って、十四、五篇のなかから有島兄弟と武者小路の文章のみ取り上げているのは、のちに三家が大成したのから見て眼識があったというべく、ゴーガンとセザンヌの写真版をみて、「清爽」さを感じたのは「当ら」ずといえども遠からずというべきであろう。さらに同じ「文章世界」がその年八月にだした「石竹号」という増刊をみると、小山内薫の「AB INTRA」という評論がのっていて、有島（壬生馬）、正親町、志賀がみななつかしい旧知であることを語り、武者小路は多分おなじ麴町幼稚園にいった人ではないかと思う。大学へいったからはドイツ語のよく出来る勉強家、読書家として、かねて噂にきいていたと語って、さらにつづけている。

「白樺の樺」という字のツクリが示すように、華族の息子さん達の集りだ。たいていは華族学校（僕らは子供の時分、学習院をこう呼んでいた）の出身だ。しかしいずれも華族を鼻にかける連中ではないらしい。先だっての雑誌にでていた『牧師の家』の評の中などには、平民にも書けそうもない思いきったことが書いてあった」新出現の「白樺」がどんな同人によって構成されているかを、一般にむかってこれほど暗示的に瞥見させてくれる文章はなかった。

たしかに小山内というとおり、華族という今までの概念にあてはまらない貴公子たちで、その点後になって内田魯庵が評したように、ロシアのいわゆる「危険思想」の巨頭がゲルツェンでもバクーニンでも、ツルゲエネフでもトルストイでも、多く貴族のうまれであるのと一脈相通するところがある。ただロシアのは寒地の大国で、スケールが巨大で激烈深刻なのに比し、温暖な小国の日本産は、規模が可愛らしいほど小さくて柔和な差がある。森鷗外は高山樗牛を評して「牙をぬかれた虎」といったが、ロシアの革命思潮の先駆者たちと「白樺」の公達とくらべると、虎を描いて猫に類した嫌いはある。しかし自然主義の無理想無解決で明け暮れした中に、かすかながら積極的

に動こうとする生命の灯を点じたことだけは争われない。彼等は閑と金がある。下にむかって傲然とのぞむ公卿的態度はないが、エリート意識の防護を語学に求めて、みな外国の本をよみ、その点で丸善のいいお得意であった。

だから「白樺」の第一号をみても、有島武郎がシエンキウィッチの「西方古伝」の翻訳をもって初登場しているのは別にふしぎはないが、後には外国文学など全くよみそうにもないような顔をしている里見弴が、チェホフの翻

訳をもってデビューをし、それからオスカ・ワイルドやゴッチェや、連号翻訳をのせたり外国ものの紹介をしている。

同人の中心の武者小路実篤のトルストイ傾倒は早くから有名で、それが丸善で求めたレクラム版から得られた知識であることは、自ら語っている通りである。田村寛貞のトルストイ崇拜は一時あるいは武者小路以上であったろう。ついに直接にトルストイと文通をはじめ、その返事の翻訳が「白樺」にのったこともある。しかし母夫人が、非常に心配するので、彼はトルストイからショーペンハワアの著書の涉獵にうつり、のちには音楽に転じてベエトウベンの研究家に一変した。

田村の父は今信玄といわれた明治の名將田村怡興造中將である。薩長閥外の甲州から出て、參謀次長に拔擢され、川上操六のあとを受けて対露策戦の全計画を立て、戦争直前の明治三十六年十月に病をもって死亡して、軍当局を途方にくれさせたが、幸い児玉源太郎のような融通無礙の能才が後をつぎ、ついに連戦連勝した。そこで軍の内部では、「日露戦争は田村の計画を児玉が実行して勝ったのだ」と云われている。その田村の子が事もあろうに、戦争絶対否定で、日露戦争の相手の日本をも痛切に非難するトルストイと手紙を交換するとは、母夫人の心配も無理がない。

「白樺」同人中、武者小路のトルストイ影響とならんで有名なのは、有島武郎のホイットマン礼賛である。それは翻訳があるのでもわかるが、その前に同志社大学で何年か講義し、しまいに自選の小冊子を印刷させて、それを教科書にもちいたが、初めは丸善を介してとりよせた。「思ひ出ばなし洋書輸入六十年」（丸善参与中村春太郎談・

早稲田大学図書館紀要第七号)に次のような談話がある。

「有島武郎さんがホイットマンを夏期大学で講義した。注文なさったわけです。二百部とりよせることにして電報したんです。せっかくポストで送ってくれと云ったのに、向うがまちがえて船で送った。途中になって有島さんから、大丈夫だねと念をおされて調べてみたら、これはいけないと云うので、電報でまたもう二百注文したわけです。それが両方とも一しょについてしまった。有島さんはよろこばれて、特別に丸善へお礼の手紙を下さいました。しかし余分のホイットマン二百ですね、かかえてどうしようか思っておりましたが、心配するほどのことなく、みんな売れましたよ」

有島は北海道大学時代にジャック・ロンドンの「野性の呼び声」を教科書にもちいた時も、初め何かの紹介でよんでこの書の内容を知り、一冊とりよせて読んでみて、内容も英語のむつかしさも、学校で講義するのにちょうどいいと思って、まとめて注文したと語っている。

柳宗悦ものちにはホイットマンの蒐集家、民芸の研究家として聞えるに至るが、「白樺」刊行の初期、世の注目を浴びたのは「メチニコフの科学的人生観」である。二回に分載され(二巻八、九号)のちに単行本としてまとめて刊行されて、深大とはいえぬが鋭利新鮮な感化を青年に及ぼした。自然主義の消極的な、事実ないし現象に偏執して、真理への感覚も意欲も鈍麻し去っているとき、それは横腹を鋭利なナイフで突き刺したような刺戟をあたえた。

この書の好評とともに、世にはさまざまな噂がながれた。著者はまだ二十歳そこそこの青年で、快適な西洋風な

書齋で勉強しているとか、その書の巻頭に母への献辞があるので、母夫人が非常によろこび、「本はいくらでも丸善から取りよせてよい」と云ったとか、まことに世の文学青年からみると涎のたれるような話であった。今後は、貴族でなくては芸術にたずさわるのは、一さいダメなのだと、やや敗北的絶望的歎声が文学青年のあいだに洩らされたものである。

文壇を席捲し、壟断した自然主義への不満から否定へと発展していった「白樺」の功績はたしかに大きい。しかし丸善との関係からいうと、これだけでは特筆するほどのことはなく、数量で彼等より多くの書物を購入した人は俵指にいとまのないほど数えられる。ただ次に説く絵画の好尚を、近代的に一変させた事績によって、「白樺」が丸善の歴史にからんでくるのである。

三 印象派と後期印象派

こういう文章がある。

「私たちが現在、雑誌『白樺』を通覧するときに、そこに毎月数枚の印象派、あるいは後期印象派の挿絵を付し、それらについて全く新鮮な情熱をもって語られているのを見る。そしてこのようなことは、それ以前の文学雑誌には見られなかったものであることを注意する必要がある。それ以前の文学雑誌『文章世界』にしても『新小説』にしても印象派以前のテクニクによって描かれた単純な対象の再現をいでない人物、風景にみだされていた。雑誌『白樺』によるこの印象派、後期印象派の移植——わが国において、印象派と後期印象派は

ほとんど同時に入ってきている——は、その当時、新しい方向に飢えていた若い画学生につよい影響をあたえたといえることができる」(土方定一「白樺とその文化史的意義」その著「近代日本文学評論史」の一章)

まことに「白樺」の果たした役割を説いて簡単で的確といふべきである。この文章はさらに、「白樺」から影響をうけた画壇の一例として中村彝の逸話をあげている。

「敏感な中村君は白樺社が後期印象派の画家たちを輸入した運動に、共鳴しない筈がなかった。彼はこれらの画家達の写真版をたくさん買入れた。彼はこれらの画家のうちでも、ゴッホとセザンヌに最も多くひかれていった」(中原悌二郎「中村彝論」)

当時は原物複製の技術はもろんのこと、原色版だって未熟で、丸善に入ってくるものが少ないのは、需要者が稀だったからだ、その買手が現われて、品物が急に動きだしたのは、だいたい「白樺」の記事の影響によると多大であった。

同じ文章はまた創刊当時の「白樺」から次のような目次をぬき出している。

「第二号(明治四十三年五月)にはセザンヌ、ゴーガンの挿絵、第八号(十一月)は「ロダン号」(斎藤与里、柳敬助、有島武郎、高村光太郎、有島壬生馬等執筆)、第二巻第二号からゴッホの手紙が訳し始められた(児島喜久雄訳)。同第三号にはルノアールを、第四号にはマネーを決定的に紹介している」

岸田劉生は右のなかのルノアールの記事をみて、「白樺」に接近しはじめた。これを左極とすれば、竹久夢二が前後期両印象派に多大の関心をよせたのは「白樺」影響の右極ともいえよう。高村光太郎が、これは「白樺」では

なく「スバル」(四十三年四月)に「緑色の太陽」なる一文を発表し、ある人が緑色の太陽をかいても、これは非なりといえない。人によってそう見えることがあるかも知れないし、自分だってそういう経験をしないとも限らぬという論旨で、たちまち有名となり、夢二の如きはそれを丸おぼえにして、中学校で講演したり、自分の画集の序文で受け売りましたりしている。

丸善の店頭にならぶ小説を、スコット、ディッケンズ、アーヴィングやハウソオンから、モウパッサン、ゾラ、フローベル、チェホフなどの大陸文学に一変したのは、花袋、天溪、抱月などの自然主義者であり、詩をバイロン、シェリイ、ユーゴー、ハイネからボードレー、ヴェルレイヌ、アルチュール・ラムボーなどに入れ替えさせたのは上田敏や蒲原有明などの象徴派詩人であるのと同じように、否はるかにそれ以上に、絵画の写真版移入をコロージャミレーや新しいところでもターナーやホイスラーであったのを、ゴッホや、セザンヌや、ルノアールに移したのが「白樺」だったのだ。

内田魯庵は絵画に興味造詣がふかく、日露戦争前後から、絵画関係の書物を続々と輸入し、ことに「ステュディオ」やパリの「サロン」の目録など、全一頁また二頁見ひらきで惜し気もなく広告した。しかし博識の魯庵の知識もまだ印象派、後期印象派の作品には及ばず、これは確かに、「白樺」の記事が丸善の店頭に反射してきたので、その変化はこの年よりもむしろ二、三年あとの方が顕著であった。

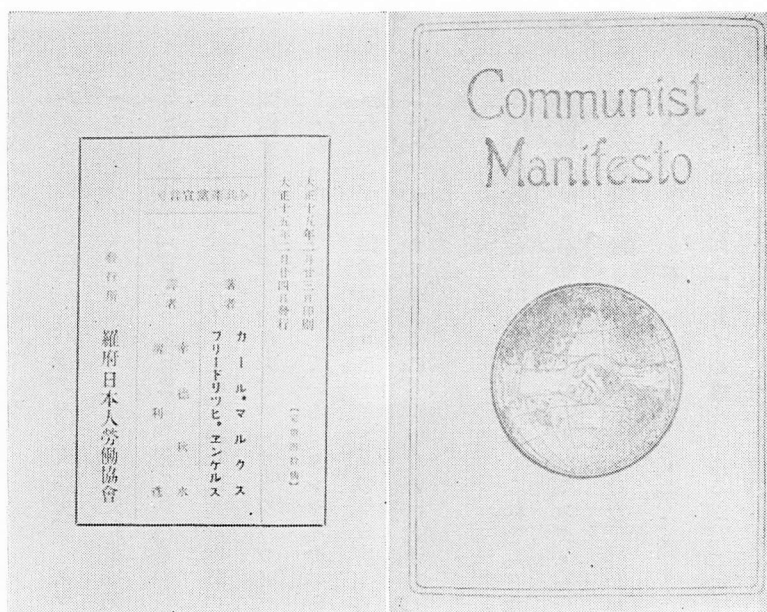
「白樺」をはじめ貴族の坊っちゃんの遊び半分の仕事で、思いもかけぬ大きな文化的意義をもつ業績になってきたのだが、その真反対に被圧迫階級の血と汗の苦悩を代表して苦闘しつづけてきた「平民社」中心の同志の、心なき、早まった大言壮語の言葉尻をとらえられて、フレーム・アップに掛けられ「天皇暗殺」という竜巻の幻影をおこしたのが大逆事件である。

それが新聞紙上で報道されるまえ、秘密裡に坊間に洩れつたわった所によると、幸徳秋水をめぐって一味数十人が、この年秋大演習で岡山に行幸の明治天皇を、途中の駅に擁して、爆弾を投下して暗殺するという容易ならぬ計画が暴露し、爆弾の試験をした新村忠雄はこの年五月二十五日郷里の信州において逮捕せられ、その首魁の幸徳秋水は六月湯河原の客遊地で逮捕せられ、官憲側はよほど前から計画したものと見え、旬日のうちにアッという間もなく、全国にわたって嫌疑者を一網打尽にした。

何の皮肉であろう。秋水のとらわれた翌七月の「学鐙」をみると *The Great French Revolution. 1789—1793* by P. H. Kropotkin が頁一面の広告面に登場し

「その名全歐を震慄するクロボトキンの熱烈なる思想を包めるの冷静なる文字を以てこの人間の最高頂を伝えたる如き蓋し近時の偉観にあらずや」

と二号活字がわめいている。



幸徳秋水 堺利彦共訳「共産党宣言」

平民社は明治の中期、日本で社会主義にいくらかでも同情と関心をもつものの全部が「平民新聞」をめぐってあつまった大集団で、彼等は多く外国語の素養があり、それがみな求道者の如き熱心さを以て、思想と科学の書物を渉猟したから、丸善ではよき顧客であった。

幸徳は正規の学校にまなんだ経歴をもたぬが、中江兆民の門下として早くから自由党系統の思想の中にそだち、国民英学会に英語をまなんで、「これだけでも読めるようにしておいてほんとによかった」と述懐している。堺枯川との共訳の「トルストイの日露戦争観」とマルクス・エンゲルスの「共産党宣言」は、明治の思想史にあざやかな足跡を印した二名訳である。ほかにクロボトキンの「パンの略取」を訳したのが名高い。時事新報が「内外百書選」のアンケートをつつた時、江湖にすすむべき書物と

して幸徳秋水は左の諸書をあげている。

フルターク 英雄伝、バックル 文明史、スマイルス セルフ・ヘルプ、ダーウイン オリジン・オブ・スปีイシス、論語、孟子、史記世家列伝、老子、盛衰記、太平記、太閤記、Kropotkin

Mutual Aid The Conquest of Bread (書名は原文が片カナとローマ字の混文になっている。)

堺利彦は、学生時代はアメリカの短篇小説を森鷗外の「柵草紙」に投稿掲載されて得意になった文学青年だが、新聞に関係するに及びディッケンズの「オリヴァー・ツイスト」を譚案した「小桜新吉」を手はじめとして、ゾラやバーナード・ショーまで日本化している。ロシア革命の勃発した時、はじめ日本では情報不足、五里霧中でその思想の系統がわからず、識者はクロボトキン系の無政府主義者がはじめたものであらうと考える者が多かったが、ひとり堺が「いや、マルクス主義者にちがいない」と予想した先見があたったのには、博識の博士福田徳三も兜をぬいている。

先輩には安部磯雄と片山潜があり、堺もこれを「日本社会主義をうんだ両親」と称している。安部の社会主義はアメリカ留学中によんだベラミイの「ルッキング・バックワード」とユーゴーの「レ・ミゼラブル」の感銘にはじまり、理論的な開眼はイリイの著書からうけた。連年早稲田大学にイリイの経済学を講義して、あの浩瀚な書を暗記するに至ったといわれる。「資本論」の全訳に着手したのも彼が最初で、かなりの分量が雑誌にのっている。片山潜の社会主義も初めはイリイの感化であるが、この人見かけによらず、古今の文学書を耽読し、アメリカ留学中ギリシャ原文でエバミノンダスをテキストにもちいて、青年時代によんだ矢野龍溪の「経国美談」を思出したり、

また東洋経済新報の記者時代に坪内逍遙訳の「ハムレット」の誤訳を指摘したりしている。彼の生誕百年にはモスクワで、彼の伝記と若干の文集を共輯した記念出版が刊行されている。

もひとり木下尚江は、キリスト教社会主義に近く、唯物派の幸徳と思想上の立場を異にしたが、しかも幸徳がその人となり信愛することは堺についてだ。洛陽の紙価を高めること「金色夜叉」にも劣らなかった「良人の自白」はトルストイの「復活」を模した痕が歴然としている。しかもそれは魯庵の翻譯が出るより前に創作されているのだから、彼もまた「復活」の心読者であったことがわかる。

その他平民社は多士済々であったが大杉栄と山川均は最年少グループの二英才として、ひとしく注目をうけ、後年は大杉はアナキストの頭目となり、山川はボルシェヴィキ的理論の指導者となって、際立つ対立をした。

これら平民社グループの読む書籍は英米の社会主義団体と連絡をとって、その発行書の直送を受けたものも少ないが、しかし一般書もよみ、それらは丸善の窓を通したものが多し。

大逆事件はフレーム・アップといっても、まるまる火のないところに煙の立ったわけではなく、一枚のハンカチを焼いて大都市の炎上とみせた政府の幻術であった。すなわち年少血気の秋水門下が、天皇暗殺を大言壮語し、おもちのような爆弾をつくった事実はある。

すなわち信州の青年宮下大吉が、岡山出の森近運平に、洋書をよんで爆弾の製法を知っているのなら教えてほしいと依頼し、森近は知らぬと答えた。しかし

「それより前秋水が、爆裂弾の製法をしらべてみたいと云ったときは、蔵書のネルソン百科字典をもちだして、

ダイナマイト原料のニトログリセリンの個所をひらいてみせたサーヴィスぶりから考えると、すでに森近の態度は消極的であった。金に困って古本屋に売りはらって、虎の巻のネルソンが手もとになかったせいもあるだろうが」(神崎清著「大逆事件」)

又幸徳秋水が、いよいよ獄に下り、死刑の宣告をうけ、死と対面しながら、自分の思想を磯部(四郎)、花井(卓蔵)、今村(力三郎)の三弁護士に開陳した「暴力革命について(仮題)」という一篇がある。その一節にクロボトキンが獄につながるとヨーロッパ第一流の学士文士が連名で、學術の進歩のためその釈放を陳情し、フランス大統領はただちにこれをゆるした――

「その連署者には大英百科全書に執筆せる諸学者もすべてこれに加わり、日本で熟知せるスペンサー、ユーゴーなども特に数行をそえて署名しました」

とある。ブリタニカといい、ネルソン百科全書といい、丸善が社運を傾注して売りひろめた大叢書だったことを、ここで思い出さねばならぬ。

同じ谷川の水も、牛これを飲めば乳となり、蛇これを飲めば毒となる。丸善取りつぎの書物が一方では華族子弟の書齋の飾りとなり、他方では大逆の逆徒の参考となる。ただ丸善では、その商品がどう使われても、その責任は問わるべきでない。

五 逝ける人々

「学鑑」五月号は「エドワード七世の崩御」を報じている。

「エドワード帝の崩御は青天の霹靂なり。平和の建造者にして帝の威望は中外に盛んなれば其崩殂は世界を通じて驚嘆痛惜せざるは無からん。故女皇五十年間英国の国礎を動きなく堅うしたる後を享け給ひたる故帝の円満無礙なる威徳は益々国威を盛んならしめ故帝の在らん限り世界の平和は保証せられたるの觀ありしに今や忽然として升遐し給ひしは惜むべき極みなるがシカモ新帝の聡明なるは夙に中外の崇仰する処なれば此英明にして壯齡なる君主を新たに迎ふるを得たるは此際慰むるに足るの幸ひといふべし。同盟国の臣民たる、我等茲に肅みて平和の恩人として永く歴史に輝くべき故エドワード帝の崩殂を哀悼し奉り、且三十年前我が日本に來遊し給ひしたるゼオルジ帝の踐祚を恭やしく祝し奉る。」

ヴィクトリヤ女王のあまりに長すぎた治世のもとで、この皇太子の行動は自由奔放をきわめ、遊蕩はおろか浮浪者に類することもあり、母後の眉をひそめしめることしばしばで、その園遊会の如き、市井で名うての破浪漢から乞食まで招かれて参列したことがあり、とうてい大帝国の王者たる資格なしと思われていたが、踐祚するとまことに稀世の名君で、母後の時代に無理な帝国主義的拡張をした国土に、守成の姿勢をとって、その若年の道楽がかえって人間の圭角をけずり、下情に通じ、國際間の協調に巧みで、その治世の十年の如く、ヨーロッパが平和を保ったことはなかった。果然この崩御から五年をおかずして第一次世界大戦はまきおこるのである。

話はちがうが昭和三十七年は生麦事件の百年にあたり、西春彦元駐英大使、市河三喜博士など日英協会的首脳者によって、その記念展覽会が丸善にひらかれた。その折の出陳に明治十三年イギリスのプリンス來朝のよりの記念

品があり、この協会会長の秩父宮妃殿下からこれはどの宮様かとの御尋ねがあり、御説明明役にあたった一同に、お答えができなかったのだが、この記事によってジョージ五世であることがわかった。明治時代、外国皇太子として日本に来朝して、のちに国王となる人初めに英のジョージ五世あり、のちにロシアのニコライ二世あり。

十月号はウィリヤム・ジェームズの計を報じている。心理学者としての名声は早く明治二十年代はじめて大西操山がこれを伝え、ドイツのヴントと対峙して久しく学界に重んぜられたが、とくに我が国としてこの学者を痛惜したのは「ブラグマティズム」の主唱者としてである。その知行合一、あるいは実際主義と訳された現実的な学説は、折からの自然主義運動と並行して、広く各界に浸透した。西洋哲学の紹介は盛んだが、真に日本の人心に根をおろしたのは、明治十年代に中江兆民の訳解したルッソーの「民約論」があり、政治説として民権青年に信奉され、つづいて二十年代に森鷗外の紹介したハルトマンの美学説があり、文壇の一部を啓発したにとどまり、三十年代に高山樗牛を中心とするニイチェの宣伝があり、奇矯の言として受取られたにすぎぬが、ブラグマティズムにいたって初めて広く日本の国土に根をおろした哲学となった。それにこれまで哲学といえば主として東大を牙城としてドイツ派の諸学説が講ぜられ、官学臭を免れなかったが、ブラグマティズムは早稲田の哲学者文学者によって信奉され、大学派ではその講師を御免こうむって一介の小説かきとなった夏目漱石がひどくこれを喜んだなど、初めて在野臭をおびた哲学ということが出来る。

そしてこの年の「学鑑」の最終号は「巨人トルストイ遂に逝く」の報道をもって終結としているのが、ことに感慨をもようさせる。「学鑑」が詩文人、その他の文化人の死を報ずるは多く半頁か一頁にすぎず、伊藤博文の奇禍

の記事でも二頁には充たない。しかるにトルストイには十頁近くの紙面を割いている。

それはトルストイの失踪してアスタボヴォの寒駅にゆきだおれ、病を發して巨木の老朽して倒るるように死んでいったまで、世界の新聞がいかに報じたかを先ずのべ、日本でも、外国の文学者芸術家の死には大して興味を示さず、先き立って死んだメレディスやシンバーンでも僅々数行で片づける新聞が、この時ばかりは数段をついやし、全頁をさき、中には二頁にわたる特集号を發行したのは――

「従来列国の如何なる大政治家、如何なる大功労者が物故したる時に於てだに決して無かりし例なるは勿論、わが日本の知名の政治家、軍人、学者が逝去したる場合に於てすら曾つて聞かざる所也」

という。

「八十の老翁一封の書を残して跡を韜晦したること既に奇なるが上に、貞淑なる老夫人が哀傷の余りに自殺せんとしたる如き、翁の未来の祝福を祈るため尼院に投じたる老妹をはるばる訪れて相見ての帰るさの途次、にわかに病起りて寥落たる寒村の駅舎に淋しく病みて遂に逝ける如き、げに此の翁にふさわしき終焉にして造化ならではたくらみ得まじき大脚色なり。翁の生涯は劇詩なり。さらにこの限りなき興味ある最後の幕を得て、あだかも凄風苦雨何十年、火にも燎かれ水にも流されて神寂びに荒れたる大原野が一点靈火に照らさるる光景を臨むが如し」

無署名の記事だが、トルストイを敬仰すること久しく深き内田魯庵ならでは、この文章を草することはできない。ここでもう一度くり返していうが、「学鐙」はトルストイに関する文章を發表したこと多いことで、前にしては

「国民之友」に接し、あとにしては大正時代刊行の「トルストイ研究」(新潮社)につなぐ。そしてこれが弔文と
なったのだ。

六 洋書五十選

十月号より、翌年の一月号まで、四か月にわたりて魯庵の「書齋生活」が連載されている。古今東西の典籍に関
係ある逸話、歴史、その所在、その所用その他談じきたり、談じ去って、まことに春蚕の糸を吐くが如く縷々とし
て尽きず、秋雲の岫を出づる如く飄々として自らたのしむ。趣味のひろく、知る事の多きに驚く。

この名篇にして、後々まで最もながく記憶せられたのは、第二回の「書籍の選択」の章で、この博識の魯庵が洋
書の良書五十選を発表したのだから、読書界の注目をひかざるを得ない。

じつはこの「一〇〇良書選」はジョン・ラボック (John Lubbock のちの Lord Avebury) が起案したので一
八八六年(明治十九年)一月十九日の「ベルメル・ガゼット」にのせたのである。日本では明治四十二年に時事新
報がはじめた。ラボックは一人で百書をえらんだが、時事新報のはひろく江湖の識者、読書家に質問を発して、十
種ずつの良書をえらんでもらって、その年七月七日発行の「時事新報文芸週報」という付録から連載しはじめて、
十七回(十一月十日発行)で終り、その百書を発表している。(このラボックと時事新報の「百書選」については
「丸善外史」に詳しく書いてあるから就いて見られたい)

時事の百書選は和漢書六〇%、洋書四〇%ぐらいの比率を占める結果となった。存外洋書の優勢な点が注目を要

する。但し魯庵からみると、むしろ不満至極なので、伎癢之余、自分で洋書五十選をつくり、この「書齋生活」のなかに掲げた。百書選としなかったのは、和漢書は時事新報の選択を目をつぶって呑んだというより、「学鑑」がもっぱら洋書販売の機関誌だから、洋書だけに限ったのだろう。

「もっとも時事新報社に寄せたる個々の答案について見れば我等と見を同じうする選択また決して少きに非れば、我等はこれら諸氏とともに、現代人の書齋の中堅としての名什五十部をえらんで新時代の読書家にすすめんとす」

と云っている。ここにはその両方を併看できる方が便宜と思い、ならべて掲げよう。

内田魯庵五十書選

- (1) Goethe—Faust
- (2) Schiller—Wilhelm Tell
- (3) Nietzsche—Also sprach Zarathustra
- (4) Hauptmann—Die versunkene Glocke
- (5) Sudermann—Frau Sorge
- _____
- (6) Ibsen—Brand
- (7) ditto—Peer Gynt
- _____
- (8) Bjørnson—Sigurd Slembe

時事新報良書選

- (1) Holy Bible
- (2) Smiles—Self-Help
- (3) Darwin—Origin of Species
- (4) Franklin's Autobiography
- (5) Aesop's Fables
- (6) Goethe—Faust
- (7) Macaulay—Select Essays
- (8) Gibbon—History of the Decline and Fall of the Roman Empire
- (9) Plutarch's Lives

-
- (9) Sienkiewicz—*Quo Vadis*
 (10) Gogol—*Rovizor*
 (11) Ostrovski—*The Storm*
 (12) Turgenief—*A Sportsman's Sketches*
 (13) Dostoefski—*The Crime and Punishment*
 (14) Tolstoi—*Anna Karenina*
 (15) ditto—*Resurrection*
-
- (16) Hugo—*Les Misérables*
 (17) Balzac—*Eugénie Grandet*
 (18) Chateaubriand—*René*
 (19) Flaubert—*Madame Bovary*
 (20) Zola—*L'Assommoir*
 (21) Daudet—*Sappho*
 (22) Anatole France—*Thaïs*
 (23) D'Annunzio—*Trionfo della Morte*
 (24) Manzoni—*I Promessi Sposi*
-
- (25) Eliot—*Adam Bede*
-
- (10) Defoe—*Robinson Crusoe*
 (11) Emerson—*Select Essays*
 (12) Carlyle—*Heroes and Hero Worship*
 (13) Arabian Nights' *Entertainments*
 (14) Shakespeare's *Works*
 (15) Hugo—*Les Misérables*
 (16) Demolins—*A quoi tient la supériorité des Anglo-Saxons*
 (17) Adam Smith—*Wealth of Nations*
 (18) Schiller—*Wilhelm Tell*
 (19) Bacon's *Essays*
 (20) Plato's *Works*
 (21) Smiles—*Conduct*
 (22) Milton—*Paradise Lost*
 (23) Lubbock—*Pleasure of Life*
 (24) Schiller—*Wallenstein*
 (25) Darwin—*Descent of Man*
 (26) Spencer—*Principles of Sociology*
 (27) Guizot—*Histoire de la civilisation en Europe*
 (28) Cervantes—*Don Quixote*

- (26) Walter Pater—Marius the Epicurean

- (27) Hawthorne—Scarlet Letter
- (28) Allan Poe—Tales

- (29) Byron—Childe Harold
- (30) Shelley—Prometheus Unbound
- (31) Fitzgerald—Rubaiyat of Omar Khayyám
- (32) Whitman—Leaves of Grass
- (33) Heine—Buch der Lieder
- (34) Verlaine—Poème

- (35) St. Beuve—Causeries du Lundi
- (36) Amiel—Fragments d'un Journal Intime
- (37) Marie Bashkirtsef—Journal
- (38) Rousseau—Confessions
- (39) Mazzini—Essays
- (40) Eckermann—Gespräche mit Goethe
- (41) H. S. Chamberlain—Richard Wagner
- (42) Kropotkin—Memoirs of a Revolution-
- (29) Dante—Divina Comedia
- (30) Irving—Sketch-Book
- (31) Homer—Iliad
- (32) Swift—Gulliver's Travel

- (33) Mill—Political Economy
- (34) Rousseau—Emile
- (35) Macaulay—History of England
- (36) Tolstoy—Anna Karenina
- (37) Goethe—Die Leiden des jungen Werthers

alist

- (43) Lombroso—L'Uomo delinquente
- (44) Otto Weininger—Geschlecht und Charakter
- (45) Carlyle—Sartor Resartus
- (46) Emerson—Essays
- (47) Thoreau—Walden
- (48) Ruskin—Modern Painters
- (49) Huxley—Essays
- (50) Schopenhauer—Essays

この魯庵のあげた五十書目のうちハイネ、カーライル、エマアソン、ゲーテの四家以外はラボックの百書選に入っていないもので、現代思潮の先駆なり、枢軸たるものであるから、これをラボック選書でおぎなえば、ほぼ十分だろうと云っている。

じつは、時事新報の良書選の(33)以下の五冊は、百書選には落第したが、若干の点数が入っているので、魯庵がひろい出して付記したのである。

自分の選には、いわば不貞小説で当時のわが官憲はにがい顔をした「アンナ・カレニナ」を洩らさなかったのはいいとして、神経病的なポーを拾いあげて世に首をかたむけさせ、ヴェルレーヌにいたっては、全く意表の外であった。上田敏の名訳の「落葉」の

ヴィオロンのため息の

身にしみてひたぶるに

うらがなし

を愛誦しておかぬ文学青年は「さすがに内田さんだ」といって、一斉に喝采したものだ。った。